

天声人語

「朝鮮通信使」の接遇を担当したのは、儒学者の雨森芳洲である。威信や体面にこだわる両国の間で幾度も板ばさみになり、頭髪は半分白に。その姿を朝鮮使節が「半白」と書きとめている▼幼時より英才の誉れ高かった芳洲は、朝鮮と中国の言葉を身につけ、大陸情勢にも通じていた。だが職責は重く、ときに病に倒れ、ときに辞表を出したほど。將軍の呼称を「国王」と改めよと朝鮮に迫るなど、幕府が国威を高めることに執着した時代だった▼芳洲が生きていたら髪が残らず白くなりかねない事態が起きた。まさかの軍事協定の破棄である。韓国側の真意は見えず、両国の連携の証を失ったような痛撃を覚える。この先、日韓にどんな未来像を思い描けばよいのか▼「前途程遠し 後会期遙かなり」。平安朝の昔、はるか渤海から訪れた外交使節が帰国する際、送別の宴でわが国の文人が披露した漢詩である。旅路の遠さを思いやり、道中の無事を祈る。いつの世も、言葉や文化の違う国々と良好で安定した関係を保つのは並大抵のことではない▼芳洲が眠る対馬では、朝鮮通信使を再現する恒例の市民行列が今夏も開かれた。ただ韓国の議員らは来島を取りやめ、復元船の初の来航も中止されて、やや寂しい祭りとなつたようだ▼「互いに欺かず、争わず、眞実を以て交わること」。芳洲が外交を論じた著作に刻んだ言葉をご紹介したい。生涯をかけて説いた「誠信」の光が再び差すのはいつの日か。

2019・8・24